

末梢神経障害

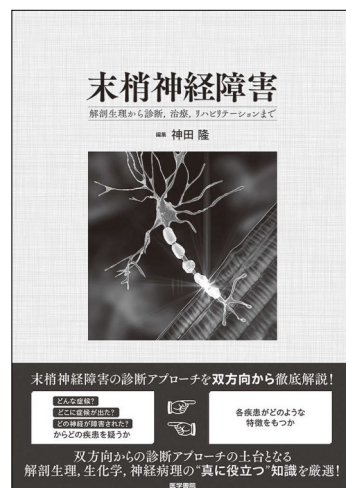
解剖生理から診断, 治療, リハビリテーションまで

神田 隆【編】

評者

井上聖啓

札幌山の上病院豊倉康夫記念神経センター



多くの方々にとって、末梢神経と中枢神経の区別は必ずしも正確に認識されていないのではないのでしょうか。私が講義などでまず学生に言うことにしているのは、末梢神経系とはシュワン細胞、結合組織が神経細胞を包囲している箇所、一方、中枢神経系とはオリゴデンドロサイト、アストロサイトが周りにある部分と教えています。

この定義に従えば、ニューロンの中には、中枢神経系の部分があれば、同時に末梢神経系に属する部分もあることになります。例えば第1次感覚ニューロン、第2次運動ニューロン、自律神経節前線維などはそれにあたります。末梢神経という“末梢の部分”という先入観でうやむやにされたり、二義的にとらえられたりしがちなのは残念なことであると同時に、神経系の理解を不十分なものとするゆえんでもあります。

この度、神田隆先生の編集、106名の執筆者による『末梢神経障害—解剖生理から診断, 治療, リハビリテーションまで』が上梓されました。全体は500ページに及ぶものですが、「末梢神経障害の基礎」、「末梢神経障害の臨床(1)—診断と治療総論」までの200ページを私は、この本の前篇とし、後に続く「末梢神経障害の

臨床(2)—疾患各論」を後篇として通覧させていただきました。

この著作はまず、その前篇に大きな特徴があります。この部分の多くは、これまで末梢神経の臨床、病理、生理などの第一線で活躍されてこられた方々による個性ある経験に支えられた記述から構成されています。深い味わいと貴重な言葉がにじむ箇所がたくさんあり、読み応えがあります。このような記述は英米の教科書には時がありますが、わが国の医学書にはあまり例がないようです。この本は多くの執筆者の合作です。お一人おひとりの経験の中からにじみ出た個性と確信に満ちた言葉でつづられているからこそ、読み物としても飽きずに、楽しみながら末梢神経疾患の理解につながる知識を自然と身につけることができるものと思います。

後篇は各論で、末梢神経疾患の一つひとつがそれぞれの専門家の手により丁寧に記載され、新しい知見を含めて文献を挙げながら解説されています。図、写真も豊富です。末梢神経疾患は整形外科でも大切な領域ですが、診療科の枠を超えて多くの分野から執筆者が選ばれている点も、編集者の幅広い見識によるものでしょう。

こうしてみていくと、神田先生

編集『末梢神経障害』の前篇の200ページは、これまでの末梢神経関係の成書にはない手法と考え方に立って編集された部分であり、最初から通して読まれることをお勧めします。後篇の300ページは座右に置いて事典的に活用されることに向いている部分でしょう。文献も充実し、索引は和名と英名で引けるようになっています。

ちなみに「末梢」を国語辞典で引いてみました。「(1)木の枝の先、こずえ (2)物のはし、末端。転じてとるに足らないこと。⇒末梢神経系」とありました。これはひどい！ どうか神田先生編集の『末梢神経障害』、特にこの前篇は通読して、神経系を論ずる上で、末梢神経系の重要性と知識を再確認されることをお勧めします。末梢神経系への興味と理解はきっと神経学をより身近なものにしてくれることと信じます。

B5・520頁

2022年10月

定価：13,200円

(本体12,000円+税10%)

[ISBN978-4-260-04939-9]

医学書院刊